

「幼児の人間関係を育む支援体制の構築」を考える

伊藤 敦子

1 はじめに

子どもをめぐる今、さまざまな問題が取りざたされています。育児・しつけ・いじめ・不登校・引きこもり・行動上の諸問題・家族・虐待、こうした問題はどのように起きているのでしょうか。現代社会の文明問題と関連しながら起き始めてきたのではないのでしょうか。

私が保育現場に立って40年目の今、少し振り返り、整理し考えてみたいと思います。

保育現場から見る社会の変化では、昭和40年初めは入所児の子ども達に3歳未満児はほとんどいなくて、たまにいと「こんなに小さいときから可愛そうに」と通り過ぎに呟かれる程で、家計のために、家業のために仕方なく共働きの家庭の子どもが主流でした。しかし昭和40年後半になるとバブルに合わせて女性の社会進出で共働きの家庭の急速に多くなりました。その背景には家庭と仕事の両立をこなしている女性が“トップレディー”と言われたり、マイホームを持つことが目標となったり、少しでも「家計にゆとりを」と思うようになった社会現象でした。それと同時に子どもに対する期待も「高学歴・高収入」と言われて、子育て、教育、にお金がかかるようになりました。

そして家庭では、父親は残業、母親は仕事、子どもは塾やお稽古事、と家族みんなが忙しく、心のゆとりがなくなり、家庭での家族のかかわりも希薄のなってきたように思います。

又地域においても、「小さな親切、大きな迷惑」と言われるようになりよい意味でのおせっかいが消えて見てみぬ振りをするようになり地域の人間関係も希薄になってきました。

一方子ども達も小学生は「かぎっ子」から「学童保育」保育園は「延長保育」幼稚園も「居残り保育」と子ども達が遊ぶ場所は集団の決められた場所で、決められた遊びになり、次第に草むらや路地で日暮れを忘れるほど走り回り、遊ぶ子どもの姿が消えていきました。今ではこれら合わせ治安の面からも難しくなりました。

これで、子どもが子ども時代を子どもらしく生きていると言えるのでしょうか。子どもは子どもと一緒に過ごすことで、仲間と互いに共感あいながら、興味や関心を広げ、その遊びに夢中になり今日を過ごす、そして仲間に受け入れられ、仲間を受け入れながら成長発達していくのです。本当に遊びの仲間と遊ぶときにはゲームや、おもちゃはいりません、子どもは身近にある何でも遊びに変えて遊ぶことが出来るからです。以前は子どもたちに保育園を卒園するとき、楽しい思い出を聞くと、目を輝かせて話すことは、保育園で教わったことや、行事で頑張ったことではなく、身体を使って友達と冒険をしたことや、大きい友達の遊びを見て「スゴイ、カッコイイ」と思ったことが自分にできたことなど、夢中で遊んだことです。今、このように遊べる子が少なくなってきたように思います、なんとなく、うろうろと時間を過ごしたり、身近なもので遊んだり。夢中になるのは、ゲームだったり、カード収集だったりします。夢中になれることは良いとしても、子どもの遊びというのは、その時その時にその子に持ち合わせた心身の機能を精一杯活用できる時間を仲間と

共有しあうことではないかと思います。

このような時間を過ごさずに肉体的に大人になっても、精神的には成熟できていないと思われま
す。いわゆるアダルトチルドレンのような存在が多数あることです。5年ぐらい前のことでしたが、
まだ男女共学になる前の男子ばかりの工業高校の養護の先生が「近頃は本当に家庭での会話がな
いのでしょうか、高校生が授業終了後保健室に沢山来るのです、そして話すことは、昨日の家の
出来事など、本当はお母さんと話すような事ばかりですよ。私の子ども(4歳のお子さん)と同じで
すよ」と話してくださった時には、そこまでなのかと少し驚きましたが今、学生を含む大人たちも同
じような人に多く出会います。子ども時代に仲間と夢中で遊ぶ時を過ごせなかったり、家族と楽し
い団欒を過ごさずに来た親には、子どもの行動への理解や、一緒に楽しく過ごす遊びがわからない
のではないかと思います。子どもが子ども時代を子どもらしく過ごし、仲間と十分遊び、人を信じ
ること、自分を信じることを身につけることが出来るようになる為にはどのような支援が必要なの
でしょうか。

2 育児支援の現場から

その当時私の保育園では「子育て家庭支援センター」を開設していました、近くに児童館が新設
され、児童館の職員も経験がないためしばらく一週間に一日出張支援に出かけていた時のことです。

①子どもが大嫌い (事例)

2歳児の男の子で沢山の子ども達が遊んでいる中で少し目立つ子がいました。それは親から離れて
うろうろしているだけでなく、友達と遊んでいるものを取ったり、壊したりしてされた子どもは泣
いているし、泣いている子どもの母親もその子にどう対応してよいか困っておられたからです。男
の子の母親を探したのですがなかなか分からず、そのうち一人で部屋から外をポーと見ている母親
を見つけました。母親に声を掛けることはせず男の子の側に行き一緒に遊びに誘いました。滑り
台や、的あてゲーム、ボーリングで遊びました。さっきとはまるで違う顔付きになり、とても笑顔
が可愛く笑い声も可愛い子どもでした。30分位その子と遊ぶと子どもも落ち着き、友達と遊べるよ
うになりました。その後、母親のそばに行き「すごくかわいいお子さんですね」と話しかけ始めま
した。初めは「今は機嫌よく遊んでいましたね」と投げやりな感じでしたが、子どもさんとの遊び
で楽しかったこと、子どもさんのかわいい言葉などを話していると「とにかくあの子が嫌なんです。
あの子に食事の支度をするのも嫌、あの子が食べるのを見るのも嫌なんです」から話が始まり、1歳
過ぎまでは病気ばかりで毎日病院通いだったこと、健康管理が悪いと、この子のせいで自分が医師
に叱られたこと、夜泣きはするし寝つき、寝起きは悪いし、今は片づけても片づけても汚す、食
事中は顔だけでなく部屋中が汚れる。など今日までの大変さ、「この子さえいなければ」と言うことま
で話された。母親の今日までの子育ての大変さと思う気持ちを聴きました。

その話しを聴きながら今日、こうして子どものために児童館に来ていることで母親として頑張っ
ておられること、などを話しているうちに涙ぐんでおられました。その日だけの出会いでしたが
(その後、お話ししたのは)半年後「この子にも兄弟がいるかなーと思っていたらできました」と嬉し
そうに報告してくださいました。

このように短時間で子どもも、また母親も落ち着いたのは、その日まで大変だったけど子育てに必死で頑張っただけで親子の愛着の基礎は形成されていたのでしょう。この時疲れのピークだったので。こんな時、ほんの少しでも母親の大変さが人に分かってもらえたこと、今日までの自分がそんなに悪い母親ではなかったこと、これで良いと自分が思えたことで子育ての自信になり子どもに向き合えるようになったようです。又子どもも同じく自分を受け入れてもらってことで友達ともかかわりが出来るようになった、ほんの一瞬の出会いの事例です。

3 保育現場から

保育の現場に長く関わり最近次第にこの仕事が重くなっていると感じる。それは養育者から子育て全般を保育者に任せられること、子どもがあまりにも重くのしかかっていると感じます。

①気になる兄弟児 (事例)

ある日、男の子2兄弟が入園してきました長男3歳、次男2歳、でそれぞれ個性的で3歳の兄は警戒心が強いのか母親から離れない、母親の後ろに隠れておどおどしている、2歳の子は元気がよくきょろきょろと見回している。それから園生活が始まり、次第に気になることが多くなってきました、3歳の兄は食べ物、おやつは林檐だけ、お菓子は全く食べない、飲み物は牛乳だけ、お茶も林檐ジュースもダメ、給食も野菜は全く手をつけず、おにぎりだけ、母親に聞いてみると「身体に良い物だから、牛乳は1日1リットル位飲みます」とのこと、近頃多くなった子育てで何かの本や、情報でこれが良いといわれると 忠実にそれだけを守り通すパターンで、母親は子育てに熱心な方ほど多く見られます。2歳児の弟もほとんど食事は同じでした。又遊びでの面では兄は友達の中に全く入れず、弟の影にいつも隠れているか部屋の隅に固まっている、又ほとんど誰とも口を利かず首を縦横に振りだけの意思表示、という様子。弟は逆に友達には乱暴でトラブルが目立つ、兄と違うところは、直ぐに母親より担任が好きになり、帰りたくないと言ったり、担任が他の子と手をつないだり、話をするだけ大声で泣き叫ぶ、散歩に出かけても保育者を独り占めしたくて道路にひっくり返って泣き叫ぶ状態で、一度は近所から「この園では園児に虐待しているのですか」と苦情があったほどでした。母親は家庭の事や子育てで「自分がこれ以上子どもと居ると虐待しそうです」と入所当時相談があり「毎日話をしたい」と言われて2年間程度、登降園時に話を聴きました。自営業で設計の仕事で夫婦でしていたが仕事がなくなり外で収入を得たいこと、父親がいらして酒を飲んで事務所をひっくり返して暴れること、夫婦喧嘩がたえないこと、自分は5人兄弟で兄ばかりで可愛がられ何不自由のない生活をしていたので今の生活が耐えられない、今、精神科に通っていること、などさまざまなことを話してくださいました。

子どもの、この状態が2年ぐらい続きました。この間、園内研修でこの子達への対応、現状など情報を常に交換し合い職員全体で共通認識を持ちました。担任だけでは余りにもおもたい子どものケースでしたから。次第に、母親も転々と変わっていた仕事も落ち着き、子どものたちも成長してきて、兄が卒園の頃から、特に気になる症状も消えてきました。

この事例のように「気になる子」の背景にある家庭の要因は次のようなものと思われる。

(金子恵美：社会福祉援助技術より参考)

- ・ 親の孤立感や育児ストレス
- ・ 子どもの育てにくさ
- ・ 不安定な生活
- ・ 不安定な家族関係
- ・ 親の成育歴の問題

このように保育現場で今「気になる子ども」が増え、しかも年々根が深くなっていると思います。その要素としては単純ではなく、育て方の問題もあれば、子どもの持って産まれた気質もあるでしょうし、それらの相互作用も考えられます。この保育現場で今、求められていることは、この「気になる子」を受け止め、的確な対応を導き出す子どもへの視点を学び深めていくことが大切な課題ではないかと思えます。

どの園でも子どもの対応が重くなっていることから「財団法人 山口県保育協会」で平成12年から3年間「気になる子どもとその対応について」の研究をしました。

4 保育に関する研究・改善事業「気になる子どもの対応について」報告書より

1) 研究作業の概要とその経過

(1) 「気になる子の保育について」のアンケート調査1回

1回目 平成13年7月

2回目(追跡調査) 平成14年1月

(2) 事例検討

平成12年から平成14年までの3年間にわたり、16回30事例の検討を行いました。アンケート調査の結果より、山口県内の保育園から事例をピックアップし、事例検討に参加をお願いしました。会議では、研究委員及び参加園関係者が気になる子どもに対する取り組みを検討し、臨床心理士の馬場玲子先生から園での関わり方、育て方、そして家庭へのフォロー等の指導・助言をいただきました。この助言に即して各園で努力工夫して、そのこの半年～1年後の姿を追跡事例として再び事例検討し馬場先生にも参加していただきました。

「気になる子の保育について」アンケート調査から

保育現場では、保育士との関わりの中で、「発達の遅れが心配される」、「じっとしてられない」、「友達との関係が上手くいかない」など、はっきりとした原因を特定することができない状況の子どもについて、現場の感覚で「気になるかどうか」という判断をしていると考えられます。そこで、保育者はどのような特徴を持つ子どもを、特に「気になる子ども」として捉えているのか、また、保育現場でどのように変化していくのかなどを把握するために、「気になる子の保育について」にアンケート調査を行いました。

2) 結果と考察

(1) 性別と年齢

333園中200園から回収され、気になる子どもは749名挙げられた。山口と山口県下、保育園児23、495名(平成13年7月現在)のうち、3.13%の園児に対して保育士が「気になる」と感じていることがわかった。749名のうち男児65.8%、女児30.2%、未記入4.0%で圧倒的に男児が多かった。一般的に女児より男児が育てにくいといわれており、この結果には、その傾向がよく現れている。

年齢では、1歳児29名、2歳児112名、3歳児178名、4歳児195名5歳児190名、園児43名と、3歳

児から5歳児にかけて集中してあげられた。これは、この時期、他児とのコミュニケーションが活発になり、問題行動もはつきしてくるためと考えられる。

(2) 「気になる子」の特徴

因子分析（主因子法・ハリマックス回転）により、気になるこの特徴の分類を行った結果 ①「言葉や行動の遅れ」、②「対人関係の問題」、③「集中困難で行動が乱暴」の3因子が抽出された。つまり ①発達や言葉に遅れが見られ、障害なのかどうか判断に迷う、②不安や緊張が高いことや、分離不安が見られるなど、対人関係で気になる様子が見られる。

③言動が乱暴であったり、注意集中困難で、集団場面で落ち着かない、といった様子を示す子どもに対して、保育士は、「気になる子ども」として捉えていることがわかった。

(3) 方法と対象

第2回アンケート調査は、保育現場で「気になる子」に対してどのように対応されるか、そして、「気になる子」の気になる特徴がどのように変化していくのかなどを把握するために1回目の調査の25項目に加え、110の質問項目を新たに追加して行った。

その結果1回目と2回目有効データが526事例となった。

(4) 気になるこの特徴と変化

調査の結果、まず、低得点事例が31事例から、109事例に増えていることから、全体的に「気になる子」は2回目調査で減少していることが言える。これは、本人の成長の力による問題の消失や、保育園の「気になる子ども」への対応によって改善していることが考えられる。

しかし、気になる特徴においては、それほど変化はなかった。ここには、第1回目調査の際には、多くの項目に渡って気になる様子が見られ、気になる特徴が絞れなかった重複事例が含まれていると考えられる。重複事例は、299事例から231事例に減少しており、これは、時期を追うことに問題が明確化されたり、保育者の詳細な観察によって、その子の気になる特徴がはっきりしたことが示唆される。

(5) 気になる子への保育園の対応

2枚目の調査の結果から見られる園での対応の多かった項目

- ・「気になる子どもと個別に関わる時間を増やした」が384事例
- ・「連絡帳などを使い、園と家庭での様子について情報交換を行った」が242事例
- ・「園と家庭とで気になる問題を共有した」が246事例
- ・「園内で事例検討会などを開き、問題について複数で検討した」が181事例

（この研究会での事例30例の記載は除き結果から考察とします）

この事例検討に取り組んでみて、気になる行動を起こしている子どもに、子ども自身の問題（障害を背負っていることをのけて）と環境の相互作用からアプローチし、保育での関わり、養育者との問題の共有という点に力を入れました。的確な指導助言もあったことで、多くの事例で改善が見られました。

5 おわりに

幼稚園教育要領の5領域の「人間関係」に“他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う”とあり保育指針には年齢別のねらいがあり5歳児には“周りの人に対する親しみを深め、集団の中で自己主張したり、また、人の立場を考えながら行動する”。

このように示されています。人が人として生きていく上で「人との関わり」が無ければ、どんな物的環境を整えても生きていけません。人との関係が人間の存在そのものを意味しているといえるでしょう。

人と関わる力を育てるということは、人という楽しい、という経験を多くすることが大切です。一人より友達と一緒にだから楽しかったといえるには、それまでに親という楽しい、安心と感じ、祖父祖母と楽しい体験を重ねて友達へと広がっていくことが自然の成長だと思う。しかし、ほんの少し育児が不安になり、子どもへ調和しているつもりが、親の望むレベルに引き上げようとする、この小さい親子のずれが子どもの成長と共に広がり、深くなることもある。以上の事から、今、幼稚園、保育所の保育者が求められることは、子育ての協働を通して、養育者との関係や地域関係機関、施設との交流を深める。そして、「保育者自身が一人ひとり子どものレベルにあわせ楽しく子どもと関わるモデルとなること」「気になる子どもに気づき、子どもの背景にある家庭の要因を理解し関わること」「親子の愛着関係の形成の援助」「多面的な家庭への理解と支援」をし、養育者自身が“子どもの最善の利益”を選択していく力を育成していくことではないでしょうか。

参考文献

- 馬場玲子・青木紀久代 「保育に生かす心理臨床」 ミネルヴァ書房 2006
佐々木正美 「いい人間関係ができる子の育てたい」 マルユエ書籍販売会社 2002
山口県保育協会 「気になる子どもとその対応」 2003
「幼稚園教育要領・保育所保育指針」第3版 チャイルド本社 2005